

黒崎 浩行
(國學院大學日本文化研究所)
hkuro@kokugakuin.ac.jp
1999 年 9 月 19 日 (日)

1 問題の所在

日本の宗教教団におけるインターネット利用の状況を把握、分析しようとする本研究は、大きくは「宗教と社会変動」の問題圏に属すると思われる。ただ、近代化、都市化、情報化などが、宗教の社会的形態や信仰形態に及ぼしている影響の量的分析ではなく、情報メディア環境におかれた宗教教団のリーダーないし参加者における社会および信仰形態の再解釈の過程に焦点をあてたい¹。

ただし、情報メディア環境といっても、ここでとりあげる CMC (Computer-Mediated Communication: コンピュータに媒介されたコミュニケーション) の場合、そのコミュニケーション特性は「カスタマイズ・メディア」([川上ほか 1993: 16-23]、[池田・柴内 1997: 26]) といわれ、利用者が自分の目的・好みにあわせて「メディアとしての設計や設定をきわめて多様に行いうるばかりでなく、その多様さを通じて、メディア上での社会も集団も個人のあり方も多様に設定し変容しうる」([池田・柴内 1997: 26]) という性格をもつ。実際、利用形態はさまざまであり、双方向メディアと言われる電子メールも、メールマガジンのように、一方向だけで発信し、受信者はいっさい批評やコメントを加えないという使い方もでき、新しい出会いが生まれるとされる掲示板やメーリングリストでも、未知のメンバーの加入を許さないこともありうる。このように所与のメディア特性がもたらしたであろう直接的な社会的変化を拒むことも自由であり、それでもなお、最低限、電子ネットワーク利用による技術的・経済的メリットは享受できるのである。

したがって、まずは、CMC のメディア特性を自明のものとしてせず、当事者が自らの生活世界のなかで CMC をどのような社会過程として位置づけ、そのうえでどのような宗教活動に利用しているか、という自己認識を探ることが、オンライン上で観察可能なデータの収集・分析に加えて、重要になってくる。

2 神社ウェブサイトの全般的傾向・再考

[黒崎 1999] では、宗教関連ウェブサイトの分析にあたって、内容の特徴と全般的傾向の把握のために、実践別分類 (そのサイトを訪れた利用者は何を行うことになるのか) を提案した。また、議論を整理するために、これをサイト運営者側の目的によって、「自己開示」・「世論へのアピール」・「ヴァーチャル儀礼」・「集会・相談」の 4 つにグループ化した。1998 年 6 月 4 日時点で Yahoo! JAPAN (<http://www.yahoo.co.jp/>) の「生活と文化:宗教:宗教別:神道:神社」に登録されていたウェブサイト 50 をこの運営目的別分類によって整理すると、一方向的な「自己開示」が主であり、双方向的な「集会・相談」はきわめて少ないこと、また、「ヴァーチャル儀礼」(バーチャル参拝) を 20 パーセントが提供していることがわかった。この 4 分類を再吟味する。

¹この観点は、田村貴紀「天理教によるインターネット利用の特性 ディスコースの中のシンボル」(『宗教と社会』学会第 7 回学術大会、1999 年 6 月)、および、田村貴紀氏とのディスカッションより着想を得ている。

情報の「フロー方向」([川上ほか 1993: 11])の観点からすると、「自己開示」と「世論へのアピール」は一方的な利用、「ヴァーチャル儀礼」と「集会・相談」は双方向的な利用といえよう。

しかし、安川一と杉山あかし [安川・杉山 1999: 101]は「双方向性」を、さらに「インタラクティブ・レベル」、「ミューチュアル・レベル」、「コミュニカティブ・レベル」の3つに区分すべきことを提唱する。情報技術の生活世界への影響を議論するには、利用者の能動性が要求されるものの、システムの供給者と利用者の活動形態が非対称にとどまるレベル、参加者がコミュニケーションの議題設定も含む内容を発信しうるレベル、「文化・価値・規範意識等々、社会的な意味世界を創出する会話空間」として機能するレベルを、明確に区分しなければならない、としている。

この区分に即するならば、神社ウェブサイトにおける、利用者ひとりひとりが与えられた選択肢のなかから選んで進んでいくような「バーチャル参拝」は、双方向的といってもインタラクティブ・レベル以上のものを志向していないように見える。「集会・相談」についても同様で、Schroeder et al [Schroeder et al 1998]がヴァーチャル・リアリティ・システムで行われるキリスト教の祈禱会において、参加者の役割やインタラクティブの構造化された形態を分析したように、そこでも双方向性の質のバリエーションをみることができるだろう。

したがって、「ヴァーチャル儀礼」、「集会・相談」という項目設定そのものは、そこでの社会過程を分析するための枠組としては、いまだ不十分である。これは、一方的な利用形態とした「自己開示」、「世論へのアピール」についても同様だろう。教団内や教団に関心をもつ人々に向けた情報提供を「自己開示」、広く教団外へ向けて社会的、政治的メッセージを載せたものを「世論へのアピール」としたが、ここでも、教団内の組織構造や外社会とのかかわりが大きく影響しているだろうことは想像できる。しかしもちろん、それら自体を把握するには至らない。

こうした不十分さを克服するための有効な分類図式を今回提示することはできなかった。さしあたり、CMC空間内での情報のフロー方向だけの問題としてではなく、CMC空間内での自足的な宗教集団の構築を志向するか、あるいは CMC 空間外にある宗教集団の補強または再構築に利用することを志向するか、ということを中心として、分類図式を編成しなおすことが必要であろう。

以下に述べる事例では、内容としては「自己開示」が中心のウェブサイトだが、ウェブサイト運営者へのインタビュー²を通じて、なぜ「自己開示」を必要とするのか、についての、CMC内外の社会的文脈をふまえた解釈を照らし出していきたい。

3 上宮天満宮の場合

3.1 上宮天満宮

宗教ウェブサイトのなかでも、先鋭的なものではなく、むしろ日本の地方都市に散見されるであろう事例として、大阪府高槻市の上宮天満宮をとりあげる。

高槻市は大阪府北東部に位置し、京都府に隣接する。第二次世界大戦後の工業化、昭和40年代の宅地化を経て、急速に人口が増加し、1995年(平成7)では36万2千人にのぼる京阪神地域のベッドタウンである³。

上宮天満宮はJR高槻駅北口の市街地域に位置する単立神社(祭神は武日照命・野見宿彌・菅原道真)で、1996年(平成8)、現宮司(代表役員)の森嘉和氏が就任した。地域ぐるみの行事として、てんじんまつり(2月25・26日)が催されるほか、てんじん竹灯り(4月3日、竹灯り、雅楽奉納、野点席)が催される。ホームページ⁴は現宮司就任後まもなく開設された。

² インタビューの分析方法については [ロフランド=ロフランド 1997(1995)] を主に参考にした。

³ 『角川日本地名大辞典 27 大阪府』角川書店、1983年。財団法人矢野恒太記念会編『日本国勢図会 CD-ROM '97/98』富士通ラーニングメディア、1997年。

⁴ <http://www.mahoroba.ne.jp/jogu/>

3.2 ホームページの内容

- 「知ってください」てんじん哲学、祭神・由緒、行事、境内、建物、宝物
- 「ご利用下さい」祭式の料金表、予約案内、お守り・「影守」案内、新・氏子制度案内
- 「ご参加下さい」宮司の自己紹介、地域の集会活動、竹林景観化プロジェクト

3.3 インタビュー

1999年8月、上宮天満宮で、宮司・代表役員の森嘉和氏と、上宮天満宮神職で大学講師のA氏にインタビューを行った⁵。ホームページ開設経緯、作成体制、利用者の反応、メリットやデメリット、今後の展開などの基本的な質問に加え、以下の質問を行った。

1. 氏子とのかかわり方のなかでのインターネットの位置づけ
2. 神社経営の合理化・情報化とのかかわり
3. インターネットのホームページがもつさまざまな可能性のなかでの方針

森宮司は、タイヤ会社・自動車会社勤務、会社コンサルタントなどを経て、前宮司の血族のつながりで1996年(平成8)に継承したという経歴をもつ。そのため、神職を儀式に関する技術を習得し、品位も備えた「エキスパート」と位置づけたうえで、自らは「マネージャー」としてのスタンスをとり、「代表役員」の肩書きを用いている。

そして、宮司着任にあたって最初に行ったのが、神社そのものを自分自身が知るために、社史『てんじんさん風土記』を編纂することだったという。ホームページ開設もその一環であった。

氏子とのかかわりのなかでのインターネットの位置づけに関しては、まず、着任後の氏子制度の見直しがある。前任者は神社運営において、氏子町にあたる商業地域の人々と交わることを避け、氏子活動は乏しかったという。そして自らが着任したさい、「寄与率」という観点から神社を支援する氏子を見直すため、氏子町にいる人々を「地縁氏子」、一般の利用者を「御縁氏子」、エキスパート能力を活かして神社に貢献する人々を「影守氏子」と分類した。「影守」は森宮司自身の造語で、独自に「影守」という名前のお守りも頒布している。これは次のような意味をもつ。

影守というのは私の好きな言葉でしてね、かげながら相手を守ると、目立たないように相手を守ると、こういう思想が今の日本にないからダメなんだ、とって。

この氏子制度の見直しには、氏子町である高槻駅前の商店街の人口減少と、昭和40年代以降の新興住宅地への人口流入がかかわっている。

駅前の人口が急速に減っていった商店街が落ちぶれていった、その息子たちはみんな裏側の住宅地にいますからね、必然的に氏子町のシェアは下がるわけです。ですから相手の傷口に塩をなすりつけているわけではなく、事実関係としてですね、一定の比率で下がるわけです。

高槻市の場合、氏子町＝「地縁氏子」の「寄与率」の低下がある一方で、新興住宅地への流入者がある。彼らが七五三などの祭式を受けるさいの判断材料を提供するために、ハローページ(職業別電話帳)に広告を掲載してきたという。そして、その延長上に、ホームページへの料金表掲載がある。

ここへ流入者が多いわけでしょう。いちおう30万都市ですから。流入者が多かったですら判断基準は何もないですから、結局ハローページですよ。ですからうちはハローページはかなり多いし、

⁵ 田村貴紀氏と共同。

来年はまた倍にしますよ。それから、電話でかかってくるのはみんなもうパターンですよ、質問が。もう、相手の声が違うだけでおなじことを聞いてきますよ。予約が必要かとか、そんなばかばかしいことをね、こっちも答えるのもいやだから、問い合わせ電話の絶滅を図れというようなことを今口走ってるんですよ。それはホームページに全部情報を入れるか、将来はこういう情報を入れるか。現実にインターネットなんかで職場のパソコンを利用して、オファー、オーダーが入ってくることもあるんですよ。七五三とかの。ただ今のはもう経営的には数量という感じは一切しませんからね。ただしいずれ、あの、インターネットを見るといようなときになったら、それはどこの神社に行こうというときになったら神社欄で検索するはずだと、そしたらそのときに物語として、わかりやすく作って必要があるということですから。

このように、森宮司は、地域内の人口流動にともなう氏子の変動に対応した、合理的な神社運営を志向しており、そのなかに低コストの広域的な広報媒体としてのインターネット利用を位置づけている。

それでは、コンピュータ・ネットワーク上での社会関係構築の可能性については、どのようにとらえているのだろうか。

まず、お守り、影守、竹絵馬などの授与品流通をインターネット上で受け付けることについては、それ自体を商業主義的に追求するためではなく、「思想普及」のためだという。前述のように「影守」は森宮司独自の着想にもとづくものであり、また竹絵馬は、上宮天満宮境内の竹林を伐採して作られたもので、再生力の少ない木材を節約するという意義がこめられているという。

また、インターネットを通じて得たメリットとしては、人と知り合ったことがあるという。1997年に発足した神社オンラインネットワーク連盟への参加を通じて、A氏などのように、後に神社運営にも参画することになるエキスパートとも知り合った。ただしそのとき、相互認識にあたって自ら「旗色鮮明」にすることが重要だという。

そのかわりこちらが旗色鮮明に何かを打ち出さないと、それに引っかかってくる人が少ないということですからね。といて、私個人のキャラクターを打ち出すほどのものもないから、この神社にかかわったから、一種のバーチャルな舞台というのか、私が演劇のプロデューサーとすれば、これそのものが一つの物語ですわね、だから、ノンフィクションなんだけど、ストーリー性はもたせたい。ただし来た人がですね、いわゆる、話と現物がかなり違うじゃないかというふうになっちゃ困るから、後追いでですね、実体のほうを一生懸命作っているということですね(笑)。最初にストーリーありきで、そのストーリーにあわせて金とか人を集めてったり、仕組みを作ってるってということですね。

このように、授与品流通の面でも人的な交流の面でも、広域的なコンピュータ・ネットワーク上で社会関係を築き上げるには、自らの独自性やキャラクターの発現が本質的に不可欠であるととらえられていることがわかる。

いっぽう、A氏は、隣接する茨木市の出身で、大学で学際的な情報システムの研究に従事しつつ、地域おこしの一環として神社にかかわるようになったという。

A氏は、深遠な宗教空間、ハレの場としての神社のイメージと、普段着で接するインターネット利用者の実態とのギャップを指摘する。また、旧来の形で神社を維持したいと思っている氏子の存在に触れ、彼らと森宮司との考え方のギャップにも言及する。そして、自分の役割は、両方の間に立ち、調整役になることだという。

A氏も森宮司と同様に、神社周辺地域の社会変化を認識しており、そのうえで森宮司の考え方を認めている。

そして、インターネットと地域社会とのかかわりについては、ゲーム機やインターネットなどが人間関係の崩壊をもたらすのではなく、地域社会の崩壊が先に始まっていて、そこで生まれる時間のすきまにそれらが入ってくるのだ、という。そして、「地域社会の再生なり、新しいコミュニティの創出」をまず目標

にすえて、そのうえでインターネットを手段、あるいは「会うための接点が生まれるための前座」として利用するという、意識改革が必要だという。

森宮司とA氏の両者とも、人口流動によって伝統的共同体が崩壊した地域での神社の対応のなかで、インターネット利用を位置づける。ここでは、インターネットについて、人との接点のもちやすさ、低コストの広報媒体といったメリットが認識されているものの、事実上、神社運営を左右してきたのは、当然ながらインターネット普及以前から進行していた新興住宅地への人口流入である、と認められており、そこで氏子制度の見直しや、また地域社会のなかで神社の存在意義を再定義することへと向かっている。

4 結論

上宮天満宮のインターネット利用で最も重視されているのは「自己開示」である。これは、都市化によって共同体的紐帯が崩壊した地域社会のなかで、地域住民との接点、また、「影守」などの独自の着想による神社への協力者との接点を求めるという必要性にもとづいている。そのさい、自らの独自性、キャラクターを鮮明にするため、神社の存在意義の再定義が試みられている。そのもっとも顕著なものが氏子制度の再定義だろう。

これは、インターネットという不特定多数に開放されたメディア空間で自己決定しつつ情報発信することによるひとつの帰結といえるかもしれない。すなわち、言い換えるなら、臨床心理学者シェリー・タークル ([タークル 1998(1995): 240] は、コンピュータ・ネットワーク上である自己から別の自己へと移行しつつ、ある一つのアイデンティティを構築しようとするコンピュータ・ネットワーク利用者を分析し、インターネットは「ポストモダンの生活の特徴づける、自己の構築と再構築の実験のための、重要な社会学実験室となった。」と述べているが、そうした見解に引き付けてみることもできるだろう。

しかし、オンラインの空間のみでなく、既存の共同体的紐帯を共有しない新興の流入者に対する自己の呈示という、より広い社会的文脈も考慮しなければならないだろう。なぜなら、このことが、そもそもインターネットを利用して広報活動を行う理由にかかわっているからである。

また、とりわけA氏において、「集会・相談」に該当するようなオンラインのみでの親密な相互行為は重視されていない。むしろ、情報機器は崩壊した人間関係の「すきま」に入り込んでくるというイメージがあり、このコミュニケーション領域じたいが充実・拡大することよりも、これを接点の一つとして利用しつつも、地域の共同体を再生していくことが期待されている。

神社界では「バーチャル参拝」に関連して、人々のインターネットへのかかわり方が、真剣なものというよりは遊びの要素を強くもち、それゆえ実際の神社参拝の行動に結びつくかどうかは疑問だという言明がなされている [黒崎 1999: 427]。『インターネット白書 '99』 [日本インターネット協会 1999: 40] によると、インターネットの個人利用者の利用目的としては3年連続で「趣味・エンターテイメント」が最も多く (1999年は81.8%)、若年齢層に行くほどその比率が高い。これを考えあわせると、インターネット利用の実態をある程度反映したものといえるだろう。上宮天満宮においては、インターネットが実態としてもつ「遊戯性」 [土佐 1998: 243] や、A氏が「すきま」と表現した個人の私事的領域を主要な活動領域とすることからは、距離をおいていることがわかる。

本研究は (財) 電気通信普及財団平成 10 年度助成研究「コンピュータ・ネットワークの普及と宗教的行為の変容に関する調査研究」 (代表研究者黒崎浩行、共同研究者葛西賢太・川島堅二・田村貴紀・深水顕真) として研究助成を受けたものである。

参考文献

- 池田謙一・柴内康文 1997 「カスタマイズ・メディアと情報の「爆発」: 電子ネットワークの外部条件」池田謙一編『ネットワーク・コミュニティ』東京大学出版会、26-51 頁。
- 川上善郎・川浦康至・池田謙一・古川良治 1993 『電子ネットワークの社会心理: コンピュータ・コミュニケーションへのパスポート』誠信書房。
- 黒崎浩行 1999 「日本宗教のインターネット利用の比較分析に向けて 神社ウェブサイトの場合」『國學院大學日本文化研究所紀要』83: 421-434。
- ロフランド, J. & ロフランド, L. 1997 (1995) 『社会状況の分析』進藤雄三・宝月誠訳、恒星社厚生閣。
- 日本インターネット協会 1999 『インターネット白書』インプレス。
- Schroeder, Ralph, Heather, Noel and Lee, Raymond M. 1998 “The Sacred and the Virtual: Religion in Multi-User Virtual Reality,” *Journal of Computer-Mediated Communication* 4(2). Retrieved March 29, 1999 from <http://www.ascusc.org/jcmc/vol4/issue2/schroeder.html>
- 土佐昌樹 1998 『インターネットと宗教: カルト・原理主義・サイバー宗教の現在』岩波書店。
- タークル, シェリー 1998 (1995) 『接続された心: インターネット時代のアイデンティティ』日暮雅道訳、早川書房。
- 安川一・杉山あかし 1999 「生活世界の情報化」児島和人編『講座社会学 8 社会情報』東京大学出版会、73-115 頁。